

主任研究員勤めの損得収支

いえ まさのり
家 正則

国立天文台教授・TMT推進室長



数物系科学専門調査班・元主任研究員(任期:平成18年4月～平成21年3月)

平成 17 年末、学振から重鎮三名が次年度からの研究員就任についてわざわざ説明に来られるという。ご丁寧にと思っていたら、受諾した専門研究員でなく主任研究員を引き受けろという話であった。当時は、技術検討開始から 16 年かけて平成 12 年に完成了すばる望遠鏡を用いて、遠宇宙の探査観測研究に取り組んでいた。また、平成 14 年度からの特別推進研究で、すばる望遠鏡の視力を 10 倍に高める「レーザーガイド星補償光学系」の開発の佳境であり、ほぼ毎月ハワイに出張していた。何でも安請け合いする筆者も、これは即答に詰まった。

実は平成 10 年ごろ、国際化する研究現場にアンケート調査し、研究費執行ルールに関する改善要望事項を天文国際共同観測専門委員長としてとりまとめ、日本学術会議の対外報告として発表する活動を行った。対外報告書案の事実関係に認識違いが無いか相談に乗ってもらうため、当時の文科省や学術振興会に何度も足を運んだ。必ずしもこの活動の成果というわけではないと思うが、意外だったのは二年かかりてこの要望書をまとめていくうちに、実際にはかなりの事項が改善されていった。研究サイドからのニーズをきちんと訴えれば、行政側も真摯に受け止めて対応してもらえる事を実感した。主任研究員なら学振の事務部門と直接相談して、このような改善をより具体化する良い機会となるとも考えた。重鎮からは、センター研究員に大学共同利用機関のメンバーが居ないのは拙いでしょうという殺し文句も決められ、結局翌日、国立天文台長に次年度以降の台内管理職を全て解任してもらう内諾を得て、数物科学主任研究員を引き受けさせて戴くことにした。

丁稚奉公を始めてみると、学術システム研究センター設立メンバーが作り上げたさまざまな仕組みはすばらしいものであることが良く分かった。第二期の役目はその仕組み

を完成させ運用することだった。実際には「そんな話、聴いて無いよ」というような新たな宿題も次々と出て来たが、各界をリードする先生方との三年間の活動は自らの視野も広がり実に有意義だった。事務方にも機敏に柔軟な対応をして戴いた。もう時効だろうから告白すると、当初の予想以上に主任研究員として時間を費やしたもの、本務の管理職を返上して節約できた時間のほうが大きく、実際は研究時間が若干増えた。表題については、望外の得をしたと思っている。

数物では頼まれてもいない仕事もいくつか産み出して取り組んだ。特に印象深いのは、日笠健一先生・鶴峰麻耶子さんと行った科研費や特別研究員審査の安定性の検討である。思いつきシミュレーションの結果を日笠先生が統計数理的に分析され、二段審査の面接対象範囲の決定、審査結果の審査員数依存性解析などについて検証した。Word 版と PDF 版が提供されていた科研費申請書についてボランティアが開発した LaTeX 版を、中山卓先生が立ち上げたサーバー上で「数物系科学専門委員会活動」として公開した。これには物理系研究者から比較的大きな反響があった。

第三期にバトンタッチした後も、折々に同窓会に誘って戴き楽しい機会を戴いている。第三期の先生方からも「話が違う」と叱られたが、これは世の習いということでご勘弁をお願いしている。



後列左から初田、石井、余田、中村、門脇。前列左から中山、家、星野、町田、榎並の各氏(2009年1月)